

▶「ぶどう園の労働者」のたとえ（マタイによる福音書 20：1～16）

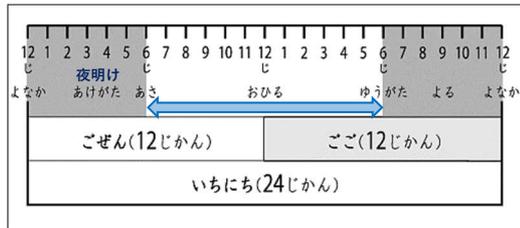
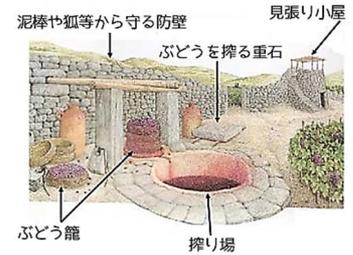
01「**天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く（日雇いの）労働者を雇うために、①夜明けに出かけて行った。**

→ぶどう園は通常、石の多い丘陵地にあつて、ブドウ（葡萄）を泥棒や狐等の動物から守るため防壁（塀）で囲まれていた。

そのため、見張り小屋（監視塔）が近くに建てられる場合もあった。

ブドウ栽培は非常に手間がかかるので、所有者はぶどう園で働く多くの労働者が必要であった。

→当時の労働時間は、朝6時から午後6時までだった。



出典：Hatena Blog(一部加工)

02 **主人は、一日につき一デナリオンの約束（→日雇い契約）で、労働者をぶどう園に送った。**

→デナリオンは、ローマ皇帝ティベリウスの肖像が刻まれた銀貨で、1デナリオンは、労働者の一日分の賃金に相当する。

03 **また、②九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、04『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った（→日雇い契約ではない）。**

05 **それで、その人たちは出かけて行った。**

主人は、③十二時ごろと④三時ごろにまた出て行き、同じようにした（→日雇い契約ではない）。

06⑤**五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、07 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った（→賃金の話もしていない）。**

08⑥**夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。**

09 **そこで、（まず、最後の）五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。**

10（そして、いちばん）**最初に（日雇い契約で）雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするととは。』**

13 **主人はその一人に答えた。『①友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束（→2節）をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。**

②わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15③自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

→ここで問題なのは、他人が祝福されているのを見て、妬ましく思う心である。

16 **このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」（→19：30）**

→神様の恵みを利己的な心で求めようとする者、恵みについて、神様と取引するような者は“後”になる。（神の僕は、神の畑で忠実に働き、結果を神に委ねればよい。）

【参考】千年王国(メシア的王国) Millenarianism/Millennarism

歴史には終わりがあり、それが歴史そのものの目的でもあるという考え方に終末論がある。終末の日が近づき、イエス・キリストが直接地上を支配する千年王国が間近になったと説き、千年王国に入るための条件である「悔い改め」を強調する。また、千年間の終わりには、サタン(悪魔)との最終戦争(ハルマゲドン/アルマゲドン)を経て最後の審判が下されるとされる。

千年王国を記す聖書の箇所は、ヨハネの黙示録 第20章の「千年間の支配」(20:4~7)である。

千年王国に入る時期をめぐって、次の三つの考え方がある。

1. **前千年王国説**(千年期前再臨説: イエス・キリストの再臨の後に千年期があるとする説)
2. **後千年王国説**(千年期後再臨説: 千年期の後にイエス・キリストが再臨するとする説) = 千年期後再臨説
3. **無千年王国説**(文字通りの存在ではなく、霊的、天的なものとする説)

1. 前千年王国説 (千年期前再臨説: イエス・キリストの再臨の後に千年期があるとする説)

千年王国を文字通り解釈する。教会の初期の3世紀間は、ローマ帝国による迫害に苦しめられていたキリスト者たちに大きな励ましと慰めをもたらすものとして、この説が最も広く受け入れられた。

前千年紀説をとる者の多くは、次のように考える(以下は患難前携挙説の説明である)。

「まずキリストが空中に再臨し、キリスト教徒を空中に引き上げ(→患難前携挙)、その後大きな困難が地上を襲う(患難時代)。そして、その患難期の最後にハルマゲドンの戦いが起こり、そのときキリストは地上に再臨し、サタンと地獄へ行くべき人間を滅ぼし、地上に神が直接統治する王国を建国する。千年が終わった後に、新しい天と地(天国)が始まる。」

前千年王国説を支持する立場で、患難前携挙説をとらない立場もある。

日本においては、内村鑑三らが、この説に基づいて再臨運動を展開し、日本の教会に広く影響を与えた。

→患難時代: 大きな苦難(患難: 口語訳) マタイ 24:21、黙示録 7:14

マタイ 24:15~28、マルコ 13:14~23、ルカ 21:20~24

2. 後千年王国説 (千年期後再臨説: 千年期の後にイエス・キリストが再臨するとする説) = 千年期後再臨説

「地上での人間の歴史が進む中でキリスト教化が進み霊的な祝福の期間(千年)に入り、その終わりにキリストが再臨し、最後の審判が行われ、サタンが滅ぼされる」という考え方である。

3. 無千年王国説 (文字通りの存在ではなく、霊的、天的なものとする説)

コンスタンティヌス1世(313年にミラノ勅令を発して、いずれの宗派の信仰も認めることで、キリスト教を公認した。「大帝」といわれる)後、ローマ帝国がキリスト教を国教化し、アウグスティヌス※1が「神の国第2巻」で唱えてからローマ・カトリックで支配的になった考え方(アウグスティヌスは最初、前千年王国説をとっていたが、この説を採用する人たちに反発して、この解釈から離れた)で、黙示録20章の「千年」というのは、キリストの初臨から再臨までの期間で、千年王国とは教会のことを指すと論じた。キリストが聖徒たちと共に、地上の教会を支配するとしている。この解釈は中世全体を通じて、ローマ・カトリックの公認の見解になった。

正教会、プロテスタント等、伝統教派は地上の教会が神の国であるとし、前千年王国説を否定している。

※1: アウレリウス・アウグスティヌス(Aurelius Augustinus、354年11月13日~430年8月28日)

古代キリスト教の神学者、哲学者、説教者、ラテン教父とよばれる神学者たちの一人。

キリスト教がローマ帝国によって公認され国教とされた時期を中心に活躍、正統信仰の確立に貢献した教父であり、古代キリスト教世界のラテン語圏において多大な影響力をもつ理論家。

【参考】新約聖書にある「わたしの名のために」

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 11 / 聖句等の総数 33250 (わたしの名のために)11個] (新共同訳) [検索語彙: わたしの名のために]	聖書Navi Active 393128091
S マタイによる福音書	10:22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。	
S マタイによる福音書	18:5 わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」	
S マタイによる福音書	19:29 わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。	
S マタイによる福音書	24:9 そのとき、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。	
S マルコによる福音書	9:37 「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」	
S マルコによる福音書	13:13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」	
S ルカによる福音書	9:48 言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」	
S ルカによる福音書	21:12 しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。	
S ルカによる福音書	21:17 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。	
S 使徒言行録	9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」	
S ヨハネの黙示録	2:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために我慢し、疲れ果てることがなかった。	

【注意】 ファイル No.152を開くには、次のパスワード(4桁半角数字)が必要になります。→【3517】